

# 街路樹

## 「主体的な学び」に向けた各校の取り組み



## 一人ひとりを大切にする教育 ～ 特別支援教育 ～

街路樹114号に、「主体的な学びについて考える」という記事を掲載しました。学校訪問等での授業でも、主体的な学びに向けての様々な手立てが講じられた授業が行われています。

■ 日常生活との関連のある学習課題や、不思議さや驚きのある学習課題を設定し、興味・関心を高めていた理科の授業。

■ 単元の学習計画を児童と共有し、見通しをもたせるとともに、児童自らが選択したり、グループで考え工夫したりしていた体育科の授業。

■ 学習したことが日常生活や他の教科にも役立つことに気づかせていた社会科の授業。

■ 友達とのかかわりの中で、新たなアイデアをもらったり、友達の音に反応したりして、音楽をふくらませていた音楽科の授業。

■ 説明的な文章に図表を組み合わせると、より説得力が増すことを学び「総合の発表で用いよう」と、次の学びへの意欲を高めていた国語科の授業。

各校においては、主体的な学びに向けての実践を重ね、改善を繰り返すことで、子ども達がより一層輝く授業づくりに努めていきましょう。

「特別支援教育」とは、障がいのある児童生徒に対してその一人ひとりの教育的ニーズを把握し当該児童生徒のもてる力を高めるための適切な指導及び必要な支援を行うものです。

このことは障がいのない子にも当てはまる、あたり前の教育だと言えるのではないのでしょうか。

実際に、本市においても発達障がいと診断された児童が在籍する通常学級で、その子の特性に配慮した指導をしたところ、他の児童にもわかりやすい授業となり、どの子も意欲的に授業に取り組むようになったという事例がいくつもあります。これは、先生方が一人ひとりの子どもの教育的ニーズを把握し、興味関心や認知の特性を授業に生かしているからです。

アインシュタインやエジソンも発達障がいであったのではないかとされています。しかしその特性を逆に生かしたため、偉大な発明や発見をして世の中に貢献することができました。

現在、子どもたちにはこれからの時代を生き抜いていくための「主体的・対話的で深い学び」が必要であると言われています。それらの学びにおいて、特別支援教育のノウハウは、どの子にも生かされるものであり、どの先生も身につけておくべきものであると考えます。



## 指導改善資料の活用(児童生徒への質問紙から)

平成29年10月にいわき市学力向上支援連絡協議会より「全国学力・学習状況調査を受けての指導改善資料」が発行されました。「教科に関する調査」の結果からは、授業において身に付けさせたい力を明確にし、確実に知識・技能の定着を図るとともに、これらを活用して新たな課題を解決していく能力を育成する取り組みの重要性について述べられています。

「児童生徒への質問紙」からは次のような結果も見られます。小学校「5年生までに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思うか」の質問について、「当てはまる」と回答している児童の割合(46.1%)は、全国(52.9%)の値を大きく下回っています。また、中学校「友達の前で、自分の考えや意見を発表することは得意ですか」については、「当てはまる」と回答している生徒の割合(16.1%)は、全国(17.6%)の値を下回っている現状です。これらのことから、自分の考えを形成し深める姿勢及びそれらを育成する指導に課題があるといえます。「自分の考えを表現する力」の育成は、今後さらに求められる「主体的・対話的で深い学び」の基盤となることです。自分の考えを持たせる場を意図的・計画的に設定し、授業スタンダードを参考にするなどして話し合いのコーディネートを工夫していく必要があります。

加えて、「学び方」を育成することにも主眼をおき、問題解決型学習や探究型学習を設定していくことの必要性についても改善資料の中で述べられています。児童生徒の協働や地域の人との対話などを試みながら、「習得・活用・探究」という学びの過程の中で、見方・考え方を働かせて知識の関連づけや情報の精選、発信を行う授業へと質的改善を図ることが有効です。さらに、自校のよさにも目を向け、児童生徒に自己肯定感を持たせる働きかけも大切になってきます。

今回の「指導改善資料」から多くのヒントを見つけ、明日からの授業改善につなげていきましょう。

